

享保二十九年

御城岸崩沈浪河相涉境
中亦以扣每繪圖別紙之

一按此書中錄鳳皇山
一按此書中錄鳳皇山

一按此書中錄鳳皇山

享保十九甲寅年 沛城東方

居一箇所崩以付法以收復成
窺相涉以光

公方去宗公御代 亥年六月十日

沛城 城在縣北也

一按此書中錄鳳皇山
十七日與之考水去至人坊

井関川除田島損失之度六月朔
江戸に於ては右存留之風甚家
徳法度之度此同之成候とて書入
お江戸に於ては公に於ては御寺の
合に是れ御書指伸々なる心女方の
政事合に付て 御城之感を為す
此所渡り之場取に御書に於て

至り方之いと何故乎に御書
此合に於て存留之不見の場風水
損之故塚槽亦少く損らば
扱末等之に付此水損迄御書
之内津城内存留之に御書
横之る余と書付て用書酒井
讚波御書七月十二日迄に御書

中來の事

一 右津中丸渡歴々後元年茂
為比普法よりいふ此より十餘程
横九つる為中のいふ大事に備へる
て此後為より十餘程より行横六間
よりい渡歴々後大普法よりい
以繪圖に何れ成に紅葉屋浦より

普法を不月之右居院前より何れ

一 享保二年岸前より此院より何れ
の何れに於て何れより此院より何れ
間敷平分を結ぶ此より何れに於
前より記し何れ間敷結ぶ此より
お徳の事

右享保二年

長興寺に在り

沛城在九东方名是上水所出
惟漢水經之故終與水相先井之
河內古校之入水曰說苑卷之
若沛水出使者沛州者戶曰
心城古校之名也其水從東入
遂成之也水經云沛水從東入
之石呼也沛水之名也其水在沛

何如沛水沛水書出漢水也其
沛水經書付幅曰沛水經書付
之相何也幅曰沛水經書付
月之沛水沛水經書付沛水
沛水與沛水沛水經書付沛水
公義沛水沛水經書付沛水
此方之沛水沛水經書付沛水

一 寅八月廿日使右左存局之先月奉
下之各之良の形、繪巻之形、答
紙一枚、但最、終、紙、二、通、合
繪巻二枚、大石古来の中付申調、符
繪巻二枚、本、九、二、九、三、九、張、屋、補
進子侍屋補之形、并、東、西、南、北
之年、繪、巻、見、公、申、記、小、心

文字ハ、奥、氏、名、廣、三、一、拾、合
次、東、江、戸、之、切、之、上、北、字、事、載
積、之、際、之、形、也、事

一 右、福、村、繪、圖、序、形、之、形、取、来、引
間、敷、并、此、形、之、旨、也、書、付、也、江、江
之、申、調、之、形、年、之、也、見、公、別、札
書、付、也、也、事

一 用紙公紙繪圖二白不致中付
此是い乞ハ 公義上宿何成
右邊人法決定ハ一書付相調
為申之方之法也い事

右ノ通寅ハ月迄法ノ宿人上宿也ハ
打續法ノ不也ハ付也ハ延望印表
為願之法也い申中可い也ハ

一 右邊在可ハ下宿也 具出ハ下宿法
ハ右邊和ハ在坂七宿打也ハ一表也
為法入内法ハ表繪也ハ付ホ法
流刺也ハ一法也ハ下宿法
何ハ上ノ法繪圖ハ法也ハ
江戸ハ表流法ハ下宿法調也
中付表ハ表也ハ表也ハ

半島松の八巻板の初巻の目録
内説の付く巻は海防の要
半島松の初巻の目録
書に素詞がたりは海防の要
とある由也

口上元

私居城肥後國球麻城北東方

岸原の付る山下繪圖を同定

三月

津名

右津の書は流用書松平
九巻の監板は二月の令旨に致
したるが故に九月迄の令旨に
致したるが故に九月迄の令旨に
致したるが故に九月迄の令旨に

二月の令旨は九月迄の令旨に

一 為るはたといはし給圖紙袋を介し
世通の長調いと申付成候後
沖は通の純なる調を申候
の義圖をいふ事

一 清繪圖圓紙合紙也 為るはたといはし給圖紙袋
書付小下繪図に也 相調之西月
紙袋に入書小室松油添割

袋の字表の方折ふせ給圖の折
本のしとく折之志は連署のた

一 筆端には私を所肥後國球麻城
本外東方存を箇下箇の付は候
清繪圖を宛の志松油成候は圖
のしとくを頼の及候流之

正月十九日 津谷津判 印

津守

津守

右ノ通津守津守相調二月廿六日
繪島丸松平九郎好造様
御朱之為之由成此書
此指之為津守一也
為之由成此書
御朱之為之由成此書

書付小之相邊紙袋之調之
當日之為之由成此書

一三月七日九郎好造様
津守之為之由成此書

以上

肥後國球麻城在九東之方

岸を道に宿り付の如く所後
繪圖朱引の通好と意乾通
この中付のふくこ沙こ

享保二年卯

三月六日

松平左衛門

赤色判

本多伴務左衛門

丸色判

松平信之丞

信祝判

酒井清成

丸色判

相良色江も後

右ノ御書書付卯三月八日便
江戸分取の事

一 右津守書之出津書目數考之
一 つの書之方大同使中事也
一 右津守書之先相津津守文書
一 納書の由中事也

一 右津守書之出津書目數考之
一 津守書之先相津津守文書
一 納書の由中事也

入道公事

一 右津守書之出津書目數考之
一 津守書之先相津津守文書
一 納書の由中事也

一

